

量子生態学とは？

量子生態学とは、あらゆる現象を電子移動だけで説明する学問です。生物、鉱物、気象、海洋、放射能など、分野を問わず同じシステムで現象変化を説明します。従って量子生態学の下には、学問分野の区別も分断ありません。データ要素も電子移動だけであり、AI解析は単純で容易です。

この学問の誕生は、自然界が現在の地球に必要と判断し弊社に理論化を求めたと思われるほど、数々の偶然が重なり実現しました。これは既存科学界の関与を拒む、自然界の意志の現れとも感じています。

量子生態学を応用した場合、応用者に対し世界最大級の成果を、自然摂理が提供することも想定できます。その上で応用は技術開発のみならず、人間の存在意義の前に自然法の基礎にもなり得ると考えます。

世界の問題を解決するリーダーシップを担い地球と社会を救う役割を目指す皆様は、是非、量子生態学をご活用頂きたいと思います。

量子生態学のカテゴリ

量子生態学では、下記のようなカテゴリで現象論を整理しています。Bは基礎カテゴリで基本的な現象説明のための理論、Sは補助カテゴリで現在の物理科学のカテゴリに沿うように細分化した理論です。各分野で応用するには、それぞれの専門性に沿った現象論を再整備し、導入しやすくする手法が必要なケースも想定されます。いずれの場合も、地球と人類社会を救うための方策を見つけることを前提に、詳細をお打ち合わせしながら共に前へ進むことが望まれます。

31	基礎理論	原子とは	量子生態学を導入するには、関係者全員に理論を理解頂くためのセミナー受講が前提になります。その後必要なテーマに関する情報やアドバイスを弊社が提供しながら方策を絞り込む手順になります。費用は都度お見積もりになります。		
		量子とは			
		ものが成り立つ仕組み			
		ものが壊れる仕組み			
		現象の基本概念			
32	現象発生理論	自然界は波と粒の世界	S1	遺伝子前駆分子論	生物進化と電子移動の分岐システム
		波と粒が作る循環システム			遺伝子前駆分子
		循環が作る代謝機構			RNAとDNA、遺伝情報の役割分担
		現象変化の場・ブラウン運動			哺乳類と人体形成進化
		ブラウン運動のメカニズム			思考脳の獲得と原子の記憶
33	地球生成理論	ビッグバンから原子地球へ	S2	人体病理論	血液と生体分子
		エネルギーからものの世界へ			血中ナノ粒子検査システム
		水の場の登場			被爆メカニズムと解消論
		生命の原点・生体分子の登場			病気発生のメカニズム
		生物代謝へ			がん
34	進化論	自然界と螺旋回転	S3	放射性物質処理論	認知症
		自然界の牽引エネルギー			奇形児や難病赤ちゃんについて
		量子の記憶が作る螺旋回転と循環世界			対策と治療法
		潜在意識と顕在意識			鉱物代謝と鉱物の人工生成
		量子生態学の意識性			吸着と量子作用
		量子生態学と輪廻転生			電子軌道把握
		絶対的自然摂理			鉱物代謝計算
					鉱物の代謝条件

株式会社ソウルリバースバンキング 〒323-1105 栃木県栃本市藤岡町甲1687-1



会社サイト



お問合せ



You Tube



学びサイト



Topetohaプロジェクト



自然界システムと進化メカニズムを解明する

QUANTUM ECOLOGY
量子生態学





たった0.57秒で地球を壊した人類社会

宇宙ビッグバンからおよそ138億年、地球誕生から約40億年、そして人類が産業革命を起こしてから約250年ほどが経過しました。人間の250年は、ビッグバン時間軸で約0.57秒、地球生成の時間軸でおよそ2秒です。

自然界が40億年かけて育んできた地球は、人間社会による250年ほどの時間で確立した産業技術により、自然の恵みを活かした営みや文化を壊滅的な異常事態に追いやっています。そればかりか、後を絶たない争いは人々の命を奪い経済格差は貧困を増産し、地球上は悲しみや苦しみで埋め尽くされています。

このまま進んだ場合、地球はどうなるのでしょうか？ 世界の人々は、人類社会は、どうなるのでしょうか？

量子生態学は、電子移動というたったひとつのメカニズムだけで、あらゆる自然界の現象を説明する学問です。量子生態学によると、現在の人間社会の行き着く先は、次のように想定できます。

「自然摂理という宇宙自然界のシステムは、今の人間社会のシステムを許容せず、全てが崩壊するのは時間の問題である」

何故そんなことが言えるのか？ **量子生態学の研究から自然摂理には、「人間が悲しむことを許さないシステムが組み込まれている」とわかっているからです。これに反する人間社会を、自然摂理は既に抹消することを決めています。今の自然災害の多発は、その現れのひとつに過ぎません。**

現行の人間社会は自然摂理にとって、人間が嫌うハエや蚊と同様です。ハエや蚊がたかると人間は不快に感じますが、感じるまでの時間は先に挙げた数字同様、0.57秒～2秒程度でしょう。不快と感じた人間は、ハエや蚊を即座に叩き潰します。自然災害の多発や温暖化現象、人々の不満とは、不快で邪魔なハエや蚊という人間社会を叩き潰すために自然発生している、自然摂理というメカニズムであることを認識して欲しいと思います。

叩き潰されて破滅するか、ハエや蚊という役割を自ら辞して自然摂理に沿う方向へ転換するか、今が回避を選択できる最後のタイミングです。

理解できる大学や科学者が、どこにもいません

量子生態学は、野上昭治・野上倫加夫婦が提唱した学問です。二人は2010年に、ある技術を完成させました。それは農業から確立したもので、農地土壌、そこで生産する作物、それを食べる人体、いずれも同じメカニズムで健全化する内容です。技術確立経緯の中で二人は、地球では、土も植物も人体も他の生物もどんな環境でも、分野を区別すること無く、全て同じメカニズムのもとに一体化して存在している、そんなことを確認していました。それ故に開発した技術が、異分野でも共通に作用していることも理解していました。二人は技術を事業化するため、第三者エビデンスを得ようと栃木県の産学官連携の窓口へ相談に行きました。そして戻ってきた答えに愕然とします。

「あなたがたの技術を理解できる、大学や研究者がどこにもいません」

途方に暮れた翌年3月、東日本大震災と福島第一原子力発電所の災害事故が発生しました。事故直後の3月末には早くも水道水に放射性物質が混入してきました。二人は自然と向き合う中で、被曝は瞬間解消可能なことを理論的に得ていました。しかしそれまで、そんな理論は必要無く、検証する理由もありませんでした。ところがその時、目の前の水道水には現実に放射性物質が混入しているのです。この事故は、二人に理論検証を試みる機会を提供している状況になっていました。そして水道水を通し、被曝は瞬間解消可能であることを確認、二人は自らの理論の正しさを認識しました。

当時二人は、このような知識は科学の専門家なら当たり前知っていると思っていました。ところが、政府からも東電からも原子力技術者からも、被曝解消の指導が一向に提供されません。それどころか低線量被曝の影響も、科学者間で見解が違っていました。何かがおかしいと思った二人は、原子力技術を調べ始めました。そして仰天しました。今の物理学界には、二人が得ていた自然界のメカニズム概念がどこにも存在しなかったのです。前年、技術を理解できる大学や科学者がどこにもいなかった原因が、ここで明らかになりました。



19世紀以降、たびたび道を間違えた人類

何故そんなことが起きているのか？ 調査の結果、19世紀以降、人類社会が何度も道を間違えたことがわかりました。

一度目は1827年、イギリスのブラウンがブラウン運動を発見したときです。当時彼は分解した花粉を筆頭に様々な物の中の粒子を観察、いずれも同じ運動を持つことを確認し、以後この運動はブラウン運動と呼ばれるようになりました。鉱物の粉も同じ運動を持つため当時の科学界では、この運動は生命活動と無関係と定義しました。

しかしこれは間違いでした。

およそ180年後、野上らもブラウン運動を観察していました。土壌も堆肥も植物も人体もいずれも、保有する粒子のブラウン運動をコントロールすることで品質が上がり、生命力に影響していること、鉱物の粉もブラウン運動で性状をコントロールできることを確認していました。

次に人類が道を間違えたのは、1861年のフランスでした。パスツールがかの有名な白鳥の首フラスコ実験を成功させたときです。当時パスツールの対極にいたのが、アントワヌ・ベシャンです。パスツールの微生物は微生物からしか発生しないとの説に対し、ベシャンは環境条件に適した微生物が自然発生すると反論していました。しかし白鳥の首フラスコの実験成功がパスツールの説を証明、世間はパスツールを絶大に支持し、やがてベシャンは世の中から消えました。

およそ150年後、野上らは顕微鏡の中で、ブラウン運動の環境次第で粒子が形状変化を起こす様子を確認していました。環境が悪い堆肥内では時間が経過すると、細長いバクテリアが自然発生していました。人体血液でも健康状態が悪い場合には、堆肥同様の棒状バクテリアが生まれ突然走り出す現場を見ていました。そして二人は、ブラウン運動が地球上のあらゆる代謝を司っていると確信していました。それを裏付けるようにパスツールが死の間際に、「微生物など何でも無い、体内環境が全てだ」そう語った記録を見つけていました。

実験室とは現実環境が反映されない仮想空間かもしれない、これが野上らの実感でした。野上らのこの思いと同じ見解を持つ人物が、当時のフランスにいました。パスツールの友人ベルナルドで、「実験医学序説」という本を執筆していました。名著と呼ばれるこの本の神髄を、今に至るまで誰も理解できずにいる、野上らはそんな感想を持ちました。

さらに20世紀初頭、間違いが発生しました。アインシュタインは、イギリスでブラウン運動が発見されたことを知らず、ブラウン運動を研究していました。彼はこの運動が原子や分子の衝突であると考え、確率論的仮説を展開しました。多くの反論の中、ペランがこの理論をベースに実験を行い、原子や分子の存在を証明しました。1926年、ペランはこの功績でノーベル賞を受賞、アインシュタインの考えの正しさが証明されました。

ブラウン運動は生命現象と関係ないとする当時の科学的見解とともに、以後、物理学界ではブラウン運動について、原子や分子の衝突統計に関する研究だけが進み、生命現象との関わりは一切研究されず、今に至っています。

ここからおよそ85年後、野上らはブラウン運動を独自技術の量子作用でコントロールしていました。間もなく二人は、ブラウン運動とは量子反応による電磁気運動で、自然界の生命代謝はブラウン運動が支配し、進化の原動力になっていることは明らかだと確信しました。

実際のところ1900年代以降、世界ではブラウン運動の真のメカニズムを知らず、ブラウン運動と生命現象の相互関係に関する研究成果が多数登場しています。しかしいずれも、大学や学会から否定され権力から圧力を受けるなど、関係者の我欲により潰され続け、世界の科学界は道を正しませんでした。量子生態学も同様で、大学、研究機関、企業、日本政府、全てから、拒絶・否定・無視を受け続けています。しかし量子生態学以外に地球を正しい方向へ進めることは絶対にできないことを、ここに断言しましょう。

自然摂理は、人類が作る技術よりも遙かに莫大なエネルギーで影響作用します。今の人間の科学技術は明らかに自然界のシステムに反しており、この存在を消し去る作業が自然摂理というシステムのもとに着々と進んでいる様相は、今の地球を振り返れば容易に理解できるはずです。世界の科学者も政治家も企業家も、この事実を認識し即座に全てを正すための行動変更を迫られています。

